私が使った一つの魔法

白草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私が使った一つの魔法

【Ｎコード】
Ｎ００３４Ｎ

【作者名】
白草

【あらすじ】
十年前に死ぬはずだった人間が、魔法の力によって生かされていた。
魔法の力は、世界に与えられるはずだった一人の生を奪ってしまっていた。
それが生み出した歪みが、今、正しい形に戻ろうとしている。

（前書き）

企画「幾夜一夜」に投稿した作品です。
この企画の主催者は、『シアワセモノマニア』の青波零也さんです。
今回の企画のキーワードは、「魔法使い」「カレンダー」「非常口」の３つ。
ＣＯＭＩＴＩＡ９３で、頒布されるらしいです。

▼　グレリー

あなたは胸から小瓶を提げている。風呂に入る時も、ベッドで眠る時も、女を抱く時も、私は直接見ていないけれど、どんな時であってもコルネスは――あなたは胸から小瓶を提げていたわね。私はそれを知っている。私たちはいつだって、たった一つの素敵な魔法で繋がっているから。私はいつだってあなたを身近に感じられた。

▼　コルネス

僕は魔法使いだ。でも僕は驕らない。魔法が使えるからって、選ばれた人間なんだと勘違いもしない。確かに魔法は有用だ。百年生き続けることも、決して遅刻をしないことも、映画のように炎や風を操ることも容易い。しかし世界が魔法使いを基準とすることはないだろう。例えば学校では学力が何よりも重視されている。無から生み出した物を永続的に存在させておくことも難しいから、魔法は社会でも必要とされていない。魔法が使えるからって、得なことなんか一つもないのさ。それでも僕は、僕が魔法使いであることを誇りに思っている。僕が使うたった一つの魔法、首から提げた小瓶の中の輝きが、あの日の記憶のままの君に――グレリーに繋がっているのだから。

▼　グレリー

まずは魔法について話そうか。私たちを繋ぐたった一つの魔法について。それはあなたが首から提げた小瓶の中にある。ガラス製で透明な小瓶は、アクセサリと呼ぶには大きすぎて、あなたが街中を歩いている間、衆人の目を引いた。手の平に収まりきらないほどの大きさで、首から吊るすのは麻糸を縒ったもので鎖ではない。しかしそれだけじゃなかった。小瓶の中で光が七色に輝いている。まる

でプリズムを通った後の光のように、鮮やかな光が生きているかのように。七色が一堂に会することもあれば、羽を休める鳥がどの木に止まるのか決めていないように、どれだけの時間止まるのか決めていないように、一日中眺めていたとしても、輝きは同じ様態を示さない。つまりあなたのせいなんかじゃなく、小瓶が原因となって、人々の目はあなたに引き寄せられる。輝きが何を意味するのかなんて知らずに。

▼　コルネス

　グレリーは死んでいる。しかしまだ生きている。矛盾していると、君は言うかもしれないね。でもそうじゃないんだ。僕はそれを知っている。だって、僕が使う唯一の魔法なんだから。知らない方がおかしい。さて、魔法の話をしよう。それを語るにはずいぶんと昔のことを思い出さなければならない。十年ほど前のことだったろうか、あの頃の僕はまだ、魔法を自分のためだけに使うことができた。その日、僕は僕らの友人と、僕の家に集まって酒を飲んでいた。そのなかに君もいたね。未成年の飲酒は禁止されていたけれど、僕らの友人は、君を除けば皆魔法使いだったから、問題なんてなかった。そもそも家から出るつもりもなかったし、その必要が生じたら、魔法でアルコールを分解してしまえばいい。だから僕らは、酔いすぎて吐くという経験をしたことがなかったし、酒が原因で何か事故が起きるなんて考えもしなかった。でもそれは起こった。気分が良くなり、誰もが眠っていた……はずだった。僕が友人に起こされた時、僕の部屋が燃えていた。誰かが故意に引き起こしたんじゃないかと思うくらい、最悪なタイミングだった。手の施しようがないほどに、炎は床を覆い、壁を伝い、天井を焦がしていた。僕らは魔法で火を消すことも忘れて、新鮮な空気を求めて家から飛び出した。僕らは気付いていなかった。僕らがいた部屋とは別の場所で、君が眠っていることに。炎が家をすっかり包んだ頃、誰かが言って初めて気付いたんだ。

▼　グレリー

あの日私は炎に抱かれて、死ぬべきだったのかもしれない。でも結局、死に切れずに生きている。あの日に起こったことを、私が起こしてしまったことを、今、懺悔したいと思っているの。目が覚めた時、私たちは炎に囲まれていた。でも諦めなかった。まだ私の意識がしっかりしているうちに、私はコルネスの家から出たの。そして、そこで力尽きた。目の前がだんだん暗くなって、息ができなくなって。ああ、私は死ぬんだなって、そう思ったの。だけど、まだ死にたくなかった。針で闇を貫いたような、あの時の私と同じくらい儚い光が、私が生きていることの証だった。手放したくない、手繰り寄せたいって、私は思った。でも駄目だった。穴は闇で塞がれて、私は死を迎え入れなければならなかった。そんな私に手を差し伸べてくれたのが、コルネス、あなただったわね。意識が徐々にはっきりしてきて、自分の体が、思っていたよりも綺麗なことを知って、私は安心した。私に優しく笑いかけてくれたあなたが、私を助けてくれたのだと思いたかった。

▼　コルネス

僕の魔法は君を、グレリーを二つに分け、一方に死を引き寄せて、もう一方を生かすというものだった。こんな魔法を僕は知らなかったし、考えたこともなかった。でも結果的に考えれば、僕はこの魔法を使ったのだ。そして君を救った。悪意さえ感じられたあの炎の海から、君の命を拾い上げたんだ。地面に倒れ、顔だけ持ち上げた君の瞳に、僕が何を感じたと思う？　君は文字通り、僕なしでは生きられなくなったんだ。君は子犬だった。飼い主の腕に抱かれ、どうかワタシを捨てないでと訴える瞳。その中に僕は、見つけたんだ。この世界にたった一つかもしれない君を。そしてそれを僕が生み出したことに気付いたんだ。忠誠を誓おう、否、誓わなければならない。僕はそう感じていた。天啓という名の鳥が僕の肩に舞い降りて

きたんだ。あの瞬間、僕は笑っていたのかもしれないね。君は僕にとびきりの笑顔を返してくれた。生気に満ちた君の瞳が、本当はまやかしなのだと僕は知っていた。だからこそ、その瞳に捕われた。鋼鉄の鎖が僕の体に食い込んでいった。逃れることなどできそうになかった。逃げる必要もなかった。僕は君を愛しているよ。二度と僕を放さないと誓ってくれないか？

▼　グレリー

私はあなたが好きだった。自分に自信が持てずにいた。あなたの言っていた通り、魔法が使えたって勉強はしなくちゃならないし、私は学校の勉強が嫌いだった。劣等生だったの。あなたに惹かれたきっかけを私は覚えていないけれど、私のないものを持つあなたが、私にとって魅力的だったことは確かだった。だからこそ私はあの日、燃え広がる炎の海から、真直ぐ外を目指さなかった。あなたを助けたかったから。あの時の私は、まだあなたを失いたくなかった。だから私は魔法を使い、炎に包まれていたあなたを死から引き剥がしたの。あなたが言った通りの魔法を使ってね。つまり、私も魔法使いだったのよ。あなたは知らなかったかもしれないけれど。私はあなたから死を引き剥がすと同時に、世界からあなたの生を奪ってしまった。今になって思えば、これが原因に違いないのだけれど、私があなたに伝えたいのは別のことなの。意識を失っていたあなたを私が抱え、炎を避けながら、あなたの家から出たの。魔法の負荷もあって、私はそこで倒れてしまった。そんな私に手を差し伸べたのが、意識を取り戻したあなただった。私たちの間で食い違う記憶は、世界があなたに与えた、あなたにとって都合の良いまやかしでしかない。もしくはあなたがでっち上げた嘘なのかしら。つまりこういうことなの。あなたを愛する？　離して欲しくない？　馬鹿馬鹿しいわ、止めてちょうだい。

▼　コルネス

そんなこと、僕が信じると思うのかい？　君の言うことこそ、君にとって都合の良いまやかしでしかないんじゃないか？　ああ、そうだ、君はそういう奴だった。嘘、嘘、嘘。一体、今までどれだけ本心から語ったことがある？　ないだろう。僕は僕の魔法で、君と繋がっているから知っている。嘘だらけじゃないか！　いい加減にしてくれ。

▼　世界

彼らの対話が一瞬のうちになされたのか、それは世界であるわたしにも分からない。歪んだ形のまま十年という時を過ごす間に、二人の心の内は、本人たちが気付くことなく、その行動、態度、表情に現れていたのだろう。対話などせずとも、二人はお互いの心を理解していたのかもしれない。

こんな二人が顔を合わせて、笑顔が生まれるはずはなかった。それなのに彼は、彼の家を訪ねてきたグレリーを、屋内に迎え入れてしまった。たとえそれが思いこみであっても、彼が持つ自信が、はたまた自惚れが、彼女から逃げることを是としなかったのかもしれない。

今、二人は向かい合っていた。部屋の中央には机が置かれ、そこには一冊の本が置かれていた。床は木製で、グレリーは暖かそうなスリッパを履いている。床が冷たいのだ。木製の壁には日めくりカレンダーがあり、日付が示すのは十二月二十四日。そして何故か、その隣にカレンダーがもう一つあった。こちらも十二月二十四日を示していたが、年度が十年前のものだった。コルネスが死ぬはずだった日。更に不思議なことがある。この部屋には、グレリーが背にしているドア以外のドアがなかった。彼女が尋ねてくる前には確かに存在していたはずだが、グレリーの魔法によって、蜃気楼のような曖昧さを与えられていた。彼女を見つめるコルネスの、首から提げた小瓶の光も消えていた。コルネスを生かしていた魔法は、既に解かれている。正しい形で、彼はわたしに捧げられようとしている。

「私は不幸だった。ちょうどあなたを助けた十年前から、私の人生は紙屑同然になった」
グレリーの口が始まりの合図を告げる。
「原因はなんだろうって、ずっと考えていたのよ。あなたが私のベッドで寝ている間も、あなたの小瓶を見ながら。それである時気付いたの。原因はあなただって。私が世界からあなたの生を奪ってしまったからだって」
彼女が右手を持ち上げる。指差したのは彼の小瓶。そこに視線を向けた後、目を見開いたコルネスに笑顔を返し、彼女は手を開く。
「だからね、コルネス。私はあなたを、正しい形で世界に返さなきゃならないの」
彼の背後の壁に、ドアが現れていた。それに気付かない彼は、彼女に何か言おうとしたのだろか。口を開いてはいるものの、誰にも声が届かなかった。そのことにも、彼は気付いていないようだ。
「さあ、十年前のあの日に戻りましょう」
死人に口なし、という言葉がある。彼の状況はまさにそれなのだ。死んでいる人間が、生きている人間に影響を与えることなど、できはしない。
グレリーが、開いた手を天井へと向けた。その瞬間、彼の部屋が燃え上がる。正確に言えば、彼の目にだけ、彼の部屋を舐める炎が映っていた。
コルネスが先程よりも大きく口を開いて、何かを告げようとした。そして蜃気楼である炎に、手の平を向けた。十年前のあの日、彼は魔法で火を消そうとしたのだ。彼の目には、彼の腰に手をまわしたグレリーが見えていたかもしれない。
「逃げましょう。このままではあなた、死んでしまうわ」
十年前、確かに告げたその言葉を、グレリーは口にする。彼の動きを眺める顔には、明日から自身を包むであろう幸せを、微塵の疑いもなく予感し、恍惚とした表情が貼り付いていた。
そして彼は諦めた。それは初めての敗北だったかもしれない。背

後を振り返り、グレリーによって作りだされたドアへと向かった。
十年前のあの日も、彼は炎を背にしてドアへ向かった。しかしドアは開かない。そして彼は炎に包まれてしまう。これが真実。彼はこのように死ぬはずだった。それがあの日、グレリーの魔法によって捻じ曲げられた。
だが、今日は十年前のあの日ではない。グレリーの十年がそうさせたのだろうか。彼が逃げるためだけに作りだされた非常口。そのノブを握った彼の手が、動く。部屋の中に、金属音が二つ響いた。ドアが開き、煙が外に流れていく。彼はゆっくりと、ドアの向こうに姿を消した。
それを見て、グレリーが振り返る。いつの間にか、彼女の後ろにあったドアが開いていた。そこから現れたのは、コルネスだった。
眉根を寄せ、一歩後ろに下がった彼を、グレリーが追う。距離を一瞬で縮めて、彼女は彼を優しく抱いた。
「あなたはこの十年、きっと幸せだったよね。でも、それは私のものなの。だから、これで全部元通り。さようなら、コルネス」
そしてコルネスは死んだ。
しかし彼女は勘違いしている。彼の生をわたしに返して、幸せになれると思い込んでいる。そんなもの、わたしは知らない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0034n/

私が使った一つの魔法

2010年10月8日13時39分発行